

2	一宮	向山小学校	ヒサノ ミドリ 名前 久 野 みどり
分科会番号 8	分科会名	音楽教育	

研究主題

思いや意図に合った表現を楽しみ、主体的・協働的に音楽活動に取り組もうとする児童の育成
 ―第4学年 歌唱教材「もみじ」を中心とした系統的な学びを通して―

研究要項

1 主題設定の理由

本学級の児童 25 名は、どの教科においても意欲的に取り組む児童が多く、特に音楽科では、歌唱や器楽など領域に関わらず、のびのびと表現活動を楽しむ姿がよく見られる。

本研究を進めるにあたり、児童が音楽の学習をどのように捉えているかを把握するため、学習に関するアンケートを実施した。その結果、「音楽の学習が好き」と回答した児童は 96% (24 名) にのぼり、学級全体が音楽に対して非常に前向きな気持ちを持っていることが判明した。また、1 学期の「プパポ」（おうち・やすゆき作曲、若松正司作曲）における二部合唱の経験を踏まえ、「二部合唱のよさはどんなところだと思いますか」と尋ねたところ、「高い音と低い音が合わさるときれい」「みんなで心を合わせられるところ」といった、音が重なる美しさや合わせて歌う楽しさを肯定的に捉える記述が多く見られた。しかし一方で、全体の約 3 割にあたる 32% (8 名) の児童は「わからない」と回答した。その理由を個別に聞き取ったところ、「つられてしまって難しい」という意見が多く、歌唱技能の不足が課題となり、音が重なる美しさを感じ取るまでには至っていない様子であった。以上の実態から、「みんなで音を合わせたい」という前向きな意欲をもち、音が重なるよさを感じ始めてはいるものの、一方で技能的な問題によって、二部合唱の真のよさを感じ取れていない児童も存在することが明らかになった。

そこで、児童の音楽に対する肯定的な姿勢を活かしながら、児童自身が課題を発見し、その解決に向けて学習方法を主体的に選択して取り組む活動を系統的に繰り返すことで、より生き生きとした音楽表現につなげることができると考え、本主題を設定した。

2 研究の内容

(1) 研究の仮説

本研究を進めるにあたり、次のような仮説を立てた。

【仮説①】児童が「もっとこう歌いたい」という思いや意図をもち、その実現に向けた学習方法を自ら選択して取り組むことができれば、主体的に学ぶ姿勢が育まれ、生き生きとした音楽表現が可能になるであろう。

【仮説②】全体学習に加え、ペアや少人数グループでの学習を取り入れて、自分や友達の声聴き合ったり、学び合ったりしやすい環境を整えれば、友達と共に音楽を創り上げる喜びを味わうことができるであろう。

(2) 目指す児童像

○互いの歌声や伴奏を聴いて、声を合わせて歌うことができる子。

- 旋律や旋律同士の関わりを聴き取り、曲の特徴を捉えた表現を工夫し、歌い方について思いや意図をもつことができる子。
- 歌詞や曲想・声部の役割に興味をもち、音楽活動を楽しみながら、仲間と進んで歌唱の学習活動に取り組むことができる子。

(3) 研究の方法

- 【手立て①】様々な教材を通じ、音楽表現を向上させるための具体的な方法を体験させることで、児童が表現に困った時に自ら解決方法を選択できるよう、主体的な活動の素地を養う。（仮説①）
- 【手立て②】ICT機器（Chromebook等）を効果的に活用して録画・視聴を行うことで、児童が自らの表現を客観的に振り返り、思いや意図、解決すべき課題を明確にもてるようにする。（仮説①および②）
- 【手立て③】自分の声だけでなく「友達の声を聴く」という意識を高めるため、少人数でのグループ活動を導入する。聴く対象を限定することで「聴いて合わせる」意識を高めるとともに、話し合いが進めやすい少人数グループの利点を活かし、児童主体の学習を推進する。（仮説②）

3 研究の実践と考察

(1) 音楽表現を向上させるための手立ての積み重ね（仮説①に対して）

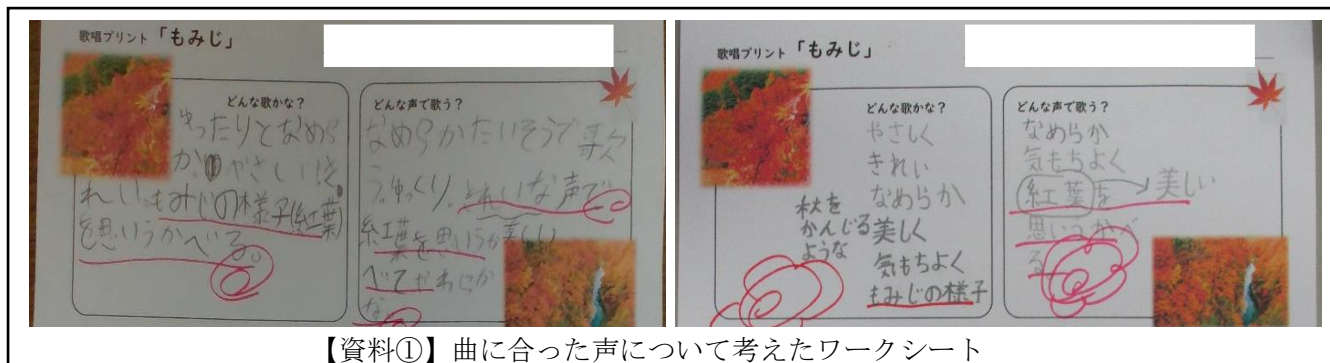
児童が「こうやって歌いたい」という意図をもった際、それを実現するための技能の身に付け方について、4月から段階的に指導を積み重ねた。

まず「ありがとうの花」（坂田おさむ作詞・作曲、佐野真裕編曲）では、新しい学級の友だちと声を合わせることを楽しみながら、歌詞に合わせて笑顔で歌うことを心がけさせた。あえて悲しい表情で歌う活動を取り入れ、表情と声色が連動することを体験的に理解させた。これは、「さくら さくら」でも活かされ、満開の桜を思い浮かべて明るい声で歌う姿が見られた。また、曲の最後の部分が低音域で音程が不安定になる児童が多くいたため、手の高さで音の高さを確認しながら歌う手法を用いた。

1学期後半の「エーデルワイス」（阪田寛夫作詞、ロジャーズ作曲、嘉手納洋子編曲）では、範唱を聴かせた後に、曲に合うように拍打ちをさせると、曲想を感じ取ってやわらかく円を描くように拍を打っている児童が多かった。また、エーデルワイスの花の写真を見せると、児童から「きれいな花だから、歌もきれいな声で歌うといい」という意見が上がり、歌詞の意味に基づいた思いや意図をもつことができた。また、フレーズを感じて歌ったり、演奏をしたりすることも指導をした。「エーデルワイス」のリコーダー奏では、2小節ごとにブレスをとってしまったり、吐く息が止まってしまい音の流れが切れたように演奏したりしている児童が多くいた。そこで、2小節ごとのブレスと、4小節ごとのブレスを教師が演奏して聴かせ、児童に「どっちの演奏がみんなの目指す『きれい』かな」と投げかけたところ、「後のほうがつながっていてきれい」と気付くことができた。そこで、階名唱の段階から、4小節ごとに交互唱をしたり、息の流れを視覚化するために4小節ごとに手で半円を描く動きを取り入れたりした。この動きを子どもたちと「なめらか体操」と名付け、授業の導入で行うことで、曲に合ったなめらかな演奏ができるようになった。さらに、その後2パートに分かれての二部合奏や「プパポ」の二部合唱を通じ、円になって互いの音を聴き合うことも指導した。また、「プパポ」では、響きを良くするために胸を開いて歌う姿勢などを指導し、これにより、特に高音域で響かせて歌う心地よさを味わわせることができた。

2学期の「ゆかいに歩けば」（保富康午作詞、メラー作曲、大畑みどり編曲）では、曲想の変化に応じて「行進」と「なめらか体操」を使い分ける指導を行った。その後の「もみじ」では、児童が自ら

「なめらかな曲だ」と気付いたり、歌詞の意味から「きれいな景色だから、きれいな声で歌いたい」と、やわらかい声を選択して歌ったりする姿が見られた。（資料①）また、副次的な旋律の学習において「主旋律につられてしまう」という課題が出た際には、ミニキーボードで音高を確認する有効性を教え、グループ練習に活用させた。

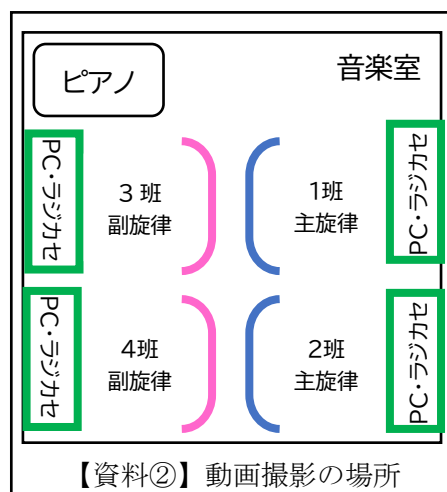


(2) ICT機器（Chromebook 等）の効果的な活用（仮説①に対して）

まず、1学期は学習の目標や児童の気づきに対して、主に教師がリードする形で「より曲に合った表現にするためにはどうするとよいか」について学習を積み重ねた。それを踏まえて、1学期の後半から少しずつ子どもたち自身で学習を進めていく形を取り入れていった。その際、児童が自身の表現を客観的にとらえて思いや意図をもつことができるよう、Chromebook を活用して動画を撮り、それを共有するためのアプリを活用して学習を進めた。

動画撮影の操作に慣れた2学期の「もみじ」第1時では、クラス全体の合唱をグループごとに撮影・視聴させた。（資料②③）児童からは「3段目の副旋律の出だしで、主旋律につられて音がずれてしまっている」「全体的に声が切れてしまっていて、もみじのきれいな様子になっていない」といった気づきがあった。教師から指示される受動的な学習とは異なり、児童自身が「つられずに歌ってきれいな合唱にしたい」「もっとなめらかに歌いたい」という主体的な表現への意欲を高めることができた。

さらに、各グループの Chromebook には、主旋律・副旋律・二部合唱の各音源を配信し、児童が必要に応じて音源を選択・再生できる環境を整えた。グループ活動では、配信されていた範唱音源を自発的に再生する姿が随所で見られた。特に、副旋律を担当する4班の児童は、「主旋律と一緒に歌うとどうしても音の高さが不安定になる」という課題から「もっと音の高さに自信をもって後半を歌いたい」という思いに対し、「副旋律のみの音源」を何度も繰り返し聴き、耳に馴染ませてから自分たちだけで声を合わせて活動していた。また、全体の響きを意識したいときには、「二部合唱の音源」を再生し、スピーカーから流れる主旋律に対して自分たちの副旋律を重ねて歌い、音の重なりを感じながら活動を進めていた。児童が「必要な時に、必要な種類の音を、必要な回数だけ」聴くという環境を確保したことで、グループ活動において児童の主体的な音楽表現の追求を支えることができた。



(3) ペアや少人数グループにおける聴き合いや話し合い（仮説②に対して）

自分の声だけでなく友達の声もよく聴いて合わせるという意識を高めるために、ペアや少人数グループの活動を取り入れた。ペアや少人数グループにすることによって、聴く対象が明確になることに加

え、学級全体で聴き合っているときよりも聴く対象となる人数が少なくなり、児童にとって聴きやすくなるためである。

まだ二部合唱の経験の浅い児童にとって、歌唱での聴き合いは音程が不安定になりやすいため、「エーデルワイス」のリコーダーの二部合奏で、少人数グループになって音を聴き合う活動から始めた。児童からは、「ペアの〇〇ちゃんの音がきれいだった」「音がいっしょになるときれいなんだと分かった」などの意見があった。リコーダーでの演奏であったことから、音程が不安定になることもなく、音が重なる美しさやかけ合いをする楽しさを十分に感じ取ることができた。この経験から、児童は「次は、歌でも2つのパートに分かれて合わせてみたい」という思いをもった。そこで、「プパポ」の二部合唱に挑戦したが、明るく元気な感じの曲であることや、中音域の音が多い曲であることから、とけ合うような声の出し方で歌うことができず、リコーダー奏で感じた「音が重なる美しさ」を感じ取ることはできなかった。しかし、「主旋律のまねをして、おいかけっこをして歌うのが楽しい」と、1人ではできない二部合唱の楽しさを感じ始めることはできた。中には、「最後の『プーパーポー』のところで、もっときれいに重ねたい」との思いをもつことができた児童もいた。

「プパポ」の二部合唱の実態から、友達の声聴きながら歌うために、輪唱「山の朝」（作詞者不明、クララ・シューマン作曲）を取り入れることにした。「山の朝」は、高いレから始まり、順次進行で下行していく。全曲を通してソから高いレまでの音が多く、児童が自然とやわらかい声で歌うことができる音域の曲である。児童は、ペアで向き合って友達の声聴きながら、やわらかい声で歌い、無理なく自分の声と重なるよさを感じて合唱することができた。ペアをつくる時には、友達の声への関心を高めたり、互いに聴き合ったり、声を重ね合ったりする楽しさをより感じるできるよう、ペアを固定せず毎回くじ引きでペアを決めて取り組ませた。また、ペアで輪唱をした後には、必ず相手のよいところを伝え合うようにした。「〇〇さんの声がよく響いていました」「ぼくが歌い終わるまで、ぼくの声ちゃんと聞いてくれてうれしかった」などの意見があり、聴き合う意識や一緒に1つの音楽を作る意識が育ってきた。

その後に取り組んだ「もみじ」第3時では、全体を主旋律（1班・2班）、副旋律（3班、4班）の4グループに分けて学習させた。全員で合唱をし、その様子をグループごとに動画撮影させた。その後、その動画をグループで視聴し、「もっとこうしたい」という思いを話し合わせた。（資料④）そして、その思いを実現するための活動方法を自分たちで選択して学習を進めた。主旋律を担当した1班では、「音の高さをもっとそろえて、一本のきれいな線にしたい」という思いから、グループ全員で円になって中央のミニキーボードを囲み、3段目の出だしの音（高いド）の音を一人ずつ順番にロングトーンをして確認し合う活動を始めた。一人が歌うと、同じグループの児童が「少し低いかも」と音を出して確認したり、「今の音、キーボードとぴったり合っていてきれい」と声をかけ合ったりし、声と気持ちを合わせて活動していた。（資料⑤）副旋律を担当した4班は、「4段目の声の高さをそろえたい」という思いから、4段目の音程を手の高さで確認しながら歌っていた。

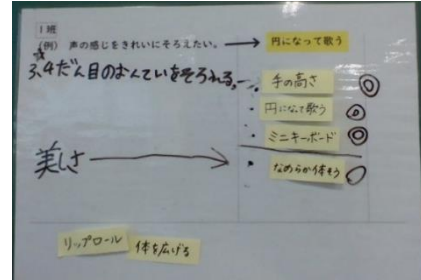
グループ活動の後には、もう一度、最初に録画したときと同じように並んで全員で二部合唱をし、録画をした。それをグループで確認し、最初の録画を見たときの思いを実現できているかについて、グループで話し合い、ホワイトボードに◎○△を書いて自己評価した。児童は、多くの項目で◎や○をつけることができ、グループ活動の成果の発表でも、グループで取り組んだことに自信をもって、最初の歌声よりもよりよい表現で歌うことができていた。（資料⑥）児童の振り返りには、「音の高さをそろえることができた」「できるようになって、とても楽しかった」などの感想があった。少人数グループで取り組んだことにより、多くの児童が積極的に話し合いながら、児童が主体となって学習を進めることができ、友達と一緒に1つの音楽を作るよさを感じることができた。



【資料④】話し合いの様子



【資料⑤】ミニキーボードでの活動の様子



【資料⑥】1班のホワイトボード

(4) 活動方法の選択肢による児童主体の学び(仮説①に対して)

「もみじ」の学習では、これまでに習得した6種類の活動方法を「黄色カード」として提示し、児童が課題に合わせて選択できるようにした。(資料⑦)

手の高さ	リップロール
ミニキーボード	なめらか体そう
円になって歌う	体を広げる

【資料⑦】黄色カード(活動方法の選択肢)

主旋律の2班は、はじめに撮った動画を見た時に「4段目の『やまのふもとの』の部分で副旋律にひっぱられて、音が高くなってしまいうからそろえたい」という思いをもった。そこで、「黄色カード」の中から「手を使った音の高さの確認」を選択した。メンバー同士で「や、ま、の、ふ、も、と、の」と発声しながら、音の高低に合わせて手を上下に動かし、「『も』の音が上がりすぎないように気をつけよう」と声をかけ合って活動した。その結果、2回目の録画や全体の成果発表においては、4段目の音の高さがとても安定し、2つの音を美しく重ねて歌うことができた。また、副旋律を担当した4班も、2班と同じような思いから「手を使った音の高さの確認」をしていた。また、「声がのびていなくて途切れてしまっているから、なめらかにしたい」という思いをもち、「なめらか体操」にも取り組んでいた。手でゆったりと半円を描きながらフレーズを視覚化して歌い、息を長く使う感覚をグループで共有することで、「もみじ」の情景にふさわしいやわらかなレガートの歌い方ができるようになっていった。このように、児童の思いに対する具体的な活動方法をあらかじめ提示したことにより、児童が主体的に学習に取り組むことができた。(資料⑧)



【資料⑧】手を使って音の高さの確認している様子と「なめらか体操」をしている様子

4 研究のまとめと今後の課題

(1) 仮説①について

仮説①

児童が「もっとこう歌いたい」という思いや意図をもち、その実現に向けた学習方法を自ら選択して取り組むことができれば、主体的に学ぶ姿勢が育まれ、生き生きとした音楽表現が可能になるであろう。

I C T機器を活用して自らの表現を客観的に把握させたことで、児童の中に「もっとこう歌いたい」という具体的な思いや意図が生まれた。また、それに応じた活動方法を段階的に提示し・蓄積させてき

たことで、児童が目的意識をもって練習方法を選択する主体的な学びが実現した。事後のアンケートでは、「相手の歌声もきかないといけないところがむずかしかったけど、うまくできるようになってとてもうれしかった」「グループで一緒に練習して歌が上手になったと思う」という達成感や自信にあふれた回答が多く見られた。

(2) 仮説②について

仮説②

全体学習に加え、ペアや少人数グループでの学習を取り入れて、自分や友達の声聴き合ったり、学び合ったりしやすい環境を整えれば、友達と共に音楽を創り上げる喜びを味わうことができるであろう。

本研究のはじめに行った学習に関するアンケートでは、二部合唱のよさについての質問で、32%（8名）の児童が、「わからない」と回答していた。しかし、本研究の後に行ったアンケートでは、「わからない」という回答は0%となり、全児童が二部合唱のよさを、実感を伴った具体的な言葉で記述することができた。（資料⑨）

- ・児童A 研究前：「わからない」→研究後：「似ている歌詞を音程やリズムを変えていっしょに歌うと、とてもきれいな歌声になるところです」
- ・児童B 研究前：「わからない」→研究後：「それぞれちがう音の高さで、もっときれいな歌声になるところです」

【資料⑨】本研究前に「わからない」と回答した児童の本研究後の記述

また、学級全体においても、「2つに分かれているパートが1つになってきれいにきこえるから」「声が重なってきれいにきこえるところ」「重なり合って美しい歌になるところ」「1つの音色だとおもしろくないから、2つのパートがあること」「みんなで歌うことで音がきれいに重なっているところ」「相手の音をきけて楽しいところ」など、音が重なるよさを感じ取っている記述が非常に多く見られた。それだけではなく、「1人ではできないけど、みんなでできる」「曲がきれいになる」「みんなで歌えて1つになれる」「一緒に歌う人と心をつなぐことで、声の重なりを感じられるところ」などの記述も多くあった。このことから、友達の歌声や音色を意識するようになったことで、友達と共に音楽を作り上げる喜びを味わうことができるようになったと考えられる。

(3) 全体を通して

本研究の手立ては成果をあげることはできたものの、児童の姿や実践の学習過程を詳細に振り返る中で、発声について課題が残った。児童主体の活動においては、どうしても「音の高さ（合っているか、つられていないか）」という判断がしやすい課題に意識が偏る傾向がみられた。「黄色カード」の中には、発声に関する方法として、やわらかい声で歌えるようになるための「リップロール」を含めていたが、児童はこれを選択せず、音を合わせようとするあまり、地声に近い発声になっている場面もあった。4年生という発達段階では、「美しい響き」を自分で判断する力が十分に育っていないことが要因と考えられる。今後は、練習を児童に委ねるだけでなく、教師が適切なタイミングで「今の音程で、さらにやわらかい声で響かせたらどうなるかな」といった、表現の質を高めるための意図的な助言を効果的に差し挟んでいく必要がある。児童の思いを尊重しつつ、教師が適切に助言することで、より質の高い表現の実現を目指していきたい。